

むかし、あるところに、平作へいさくというお百姓が、おかみさんといっしょに暮らしていました。平作は、貧乏で、いくら働いても働いてもお金がありませんでした。

ある年の大晦日おおみそかのこと、平作は、

「おれはいくらかせいでも、少しもお金ができない。もう、いやになった」といって、座りこんでしまいました。うでぐみをして考えているうちに、平作は、

「ああ、あしたは正月だから、家のそうじぐらいはしよう」と思いつきました。そこで、まず、押し入れを開けてみました。すると、中に、きたないじいさまが座って、しきりに鼻をすすっていました。

「おまえ、いったいだれだ」と平作がきくと、じいさまは、

「おれかい。おれは貧乏神だ」といいました。

「ああ、そうだったのか。貧乏神なんぞに入りこまれては、いくらかせいでもお金がでないのはあたりまえだ」

平作とおかみさんは、相談して、家から逃げだすことにしました。荷物をこしらえて、夜の明けるのを待っていると、どこかで、がさごそ、がさごそと音がします。どうも押し入れの中ようです。そこで、押し入れを開けてみると、貧乏神が、せつせとわらじを作っていました。

「おまえ、なんでわらじなんか作っているんだ」と、平作がきくと、貧乏神は、

「おまえたちが、逃げ出すというから、わしもいっしょに逃げようと思ってな。そのしやくにわらじを作っているんだ」といいました。

平作は、どうしても貧乏神から逃げられないと分かって、すっかりしよげかえってしまいました。すると、貧乏神は、

「そうおまえたちをいじめてもかわいそうだな。おれが銭ぜにを出すから、これで酒を買って来い。今夜は年越しとしこの晩だから、いっしょに酒を飲もう」といいました。

酒を買って来て、平作とおかみさんと貧乏神は、三人でお酒を飲みました。そのうち、貧乏神が、

「あしたはお正月だから、今夜はおまえにいい事を教えてやる」といいました。そして、「夜がふけると、金の神さまと、銀の神さまと、銅の神さまが、家の前を馬に乗ってお

通りになる。そのうちのどれかをつかまえると金持ちになれるぞ」と教えてくれました。

平作とおかみさんは喜んで、夜がふけるのを待ちました。

やがて、キンジャラララン、キンジャララランと音がして、金の神さまが馬に乗って近づいてきました。平作とおかみさんは、飛び出して行きましたが、あんまりきらきらがやいていて、目がくらんで、つかまえることができませんでした。

がっかりしていると、こんどは、ギンジャラララン、ギンジャララランと音がして、銀の神さまが馬に乗って通りました。ふたりは、こんどこそつかまえようと、飛び出して行きました。ところが、馬の足が速くて、とても追いつくことができませんでした。

やがて、ドーンガラガラ、ドーンガラガラと音がして、銅の神さまが通りました。ふたりは、何としてもつかまえようと思って飛び出しました。そして、やつのことで、つかまえました。ところが、よく見ると、銅の神さまと思ったのはまちがいで、貧乏神をつかまえていました。平作とおかみさんは、がっかりして座りこんでしまいました。すると、貧乏神はいいました。

「それぞれ、そういうふう^{ほう}に力を落とすのがいけない。力を落とさずに、ふたりそろってせつせと働けばいいんだ。おれはこの家を出て行く。おれが出て行けば、お金がたくさんできるぞ」

貧乏神はそういって、家を出て行きました。平作とおかみさんは、骨身をけ^{ほねみ}けずってせつせと働きました。それで、末は、お金持ちになったというおはなし。

村上郁再話